

## 小羊の過ぎ越し

著者	秋山 学
雑誌名	古典古代学
号	9
ページ	83-100
発行年	2017-03-31
その他のタイトル	Pasqua dell ' Agnello
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00145340">http://hdl.handle.net/2241/00145340</a>

## 小羊の過ぎ越し

秋山 学

□

筆者は本稿に先立つ拙論において、紀元後 2 世紀の小アジア地方で勢力を有していた「14 日派」と呼ばれるキリスト教のグループについて記した（秋山：2017）。いまその概要をここに記すと、彼ら「14 日派」は、『ヨハネ福音書』の伝えるカレンダーに基づいて、キリストが十字架上で磔刑死した日がユダヤ暦ニサンの月の 14 日であったという伝承を墨守し、キリストの復活の祭義（パスカ）をこのニサンの月の 14 日に行うことを習慣としていた。ニサンの月の 14 日とは、ユダヤ教における過ぎ越しの祭（ペサハ）が始まる前日であり、『ヨハネ福音書』によれば、この日の午後（ヨハネ 19,14）、イエスは十字架上で磔刑死を遂げるが（ヨハネ 19,33）、これは同日つまり「準備の日」（ヨハネ 19,31 ほか）に生贄の小羊が屠られる（出エジプト 12,6）のと時を同じくしてのことであった。すなわち 14 日派は、ユダヤ教において生贄の小羊が屠られるのと同時にイエスが磔刑死を遂げたのを記念し、その 14 日にキリスト教のパスカ・復活祭を祝う慣習を持っていたのである。この 14 日派グループは、ユダヤ教徒たちが「小羊の屠殺」を行っている間、自分たちだけの集会を開き、断食をしていたと伝えられる。そしてユダヤ人たちがそれに続く過ぎ越しの晩餐の儀式を終えたことを確認すると、自分たちの「愛餐」の式を執り行ったとされる。

『ヨハネ福音書』と共観福音書（『マタイ福音書』『マルコ福音書』『ルカ福音書』）では、イエスの十字架磔刑をめぐる日付が一日異なるということは古くからよく知られてきた。まず『ヨハネ福音書』第 18 章によれば、「人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過ぎ越しの食事をするためである」（ヨハネ 18,28）とある。そしてイエスが裁判の席に着き、彼に対する死刑判決が行われたのは「過ぎ越しの祭の準備の日で、時は昼の 12 時ごろであった」（ヨハネ 19,14）。「その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架上に残しておかないために、脚を折って取り降ろすようピラトに願い出た」（ヨハネ 19,31）と述べられる。「特別の安息日」とは、ユダヤ教の安息日すなわち土曜日が、過ぎ越しの祭の初日（ニサンの月の 15 日）と重なる場合の土曜日を指す（この日付から、この年は紀元後 30 年であったと推測される）。こうして『ヨハネ福音書』によれば、イエ

スは過ぎ越し祭の前日、神殿で生贄の小羊が屠殺されるのと同時に十字架刑に処せられたことになる。

一方共観福音書、例えば『ルカ福音書』第 22 章には「過ぎ越しの小羊を屠る除酵祭の日が来た。イエスはペトロとヨハネを使いに出そうとし、<行って過ぎ越しの食事ができるように準備せよ>と言った」(ルカ 22,7-8) とある。古代の計日法では、一日は日没から始まるため、『ルカ福音書』にあって「最後の晚餐」は、『出エジプト記』(12,8) ほかの規定に基づき、ニサンの月 15 日(金曜日)の開始、すなわちその日没後に行われたことになる。つまり上の記述は、ニサンの 14 日に小羊を屠り、それに続く夜、すなわち 15 日に過ぎ越しの食事が始められることを前提にしている。このカレンダーは『マタイ福音書』『マルコ福音書』にあって同様であり、かくして共観福音書記者たちによれば、過ぎ越しの食事としての最後の晚餐はニサンの月の 15 日に行われ、その後に為されねばならない十字架上的キリストの磔刑死は、夜が明けたのちの同じく 15 日の出来事とされる。一方『ヨハネ福音書』によれば、上述のように十字架上的イエスの磔刑死は「過ぎ越し祭の準備の日」、すなわちニサンの月 14 日の出来事である。すると『ヨハネ福音書』における「晚餐」(13,2) は、それ以前に行われたことになり「過ぎ越しの食事」ではなくなる。確かに同福音書では、それが「過ぎ越しの食事」であるとは記されず、単なる「晚餐」であったと述べられているだけである(ヨハネ 13,2)。以上をまとめると、

1) 『ヨハネ福音書』ではユダヤ暦ニサンの月 14 日(金曜日)の午後、イエスは十字架上で磔刑死した。

2) 一方、共観福音書では、イエスが十字架上で死を遂げるのは、ニサンの月 15 日(金曜日)の午後 3 時ごろである(ルカ 23,44)。

3) これにともない、共観福音書に描かれる「最後の晚餐」は、十字架刑に処せられる日の前夜、すなわち 15 日の開始とともに行われたことになる。共観福音書にあって、これは『出エジプト記』12,8 に記された過ぎ越し祭の規定に適合しており、共観福音書によれば、イエスによる「最後の晚餐」は過ぎ越しの食事として行われている。

4) 一方ヨハネ福音書には、「最後の晚餐」に当たる晚餐が「過ぎ越しの食事」であるとは明記されていない。実際ヨハネ福音書では、イエスは 14 日に磔刑死を遂げるため、その日の日没とともに始まるユダヤ教の「過ぎ越しの食事」を主宰することは不可能である。

すると、ヨハネ福音書と共観福音書の相違点は、以下の二点に帰着することになる。

あ) イエスの磔刑死は、ニサンの月の 14 日のことであったのか、それとも 15 日のことであったのか。

い) (最後の) 晚餐は、過ぎ越しの食事であったのか、それとも過ぎ越しの食事ではない夕食であったのか。

ちなみにこの際、イエスの磔刑死が金曜日の出来事であったという点に関しては、四福音書に共通している。

現在、「どちらの伝承が史実的により正確かを決定するのは、いまではもう不可能に近い」（マックレイ：183）とされ、四福音書すべての記述に基づいて、これらの問題点を解決しようとする試みは、今日ではもはや絶望的であるとされる。たとえばジョーベールは「共観福音書とヨハネ福音書とで、基づいていたカレンダーが異なる」とする新説を1957年に提唱し（Cantalamessa 2007：96），これが一時期もてはやされたこともあった（レップレ1966：186）。しかしこの説に従うなら、ヨハネ共同体が独自に小羊の屠殺を行っていたなどの仮定を施さねばならなくなる等の理由から、いまではこの説を採る研究者はごく少ない。現段階では少なくとも、史実としては『ヨハネ福音書』の伝える伝承が正しかったとされている。

本稿では、イエスを「過ぎ越しの生贄として屠られる小羊」として捉える『ヨハネ福音書』の理解と記述を、終始支持したいと考える。その際に、共観福音書記者たちは史実（すなわち『ヨハネ福音書』の伝える日付）を知っており、意図的にこれを操作したのだと考えてみたい。なぜなら共観福音書記者たちの「操作」とは、上述のように、イエスの十字架刑の日付を14日から15日に動かすだけのものであり、曜日に関しては何ら変えていない。この操作を施すだけで、イエスが「最後の晚餐」を「過ぎ越しの食事」として主宰するということが可能となるのである。また、特にルカ福音記者はパウロの弟子だとされるのであるが（秋山2007：29），パウロは「わたしたちの過ぎ越しであるキリストは屠られた」（1コリント5,7）と記し、イエスが生贄の小羊として屠られたとされる伝承（史実）を知っていたと思われる。以下本稿では『ヨハネ福音書』にならい、イエスを一貫して「生贄の小羊」と捉える試みをしたい。

また「ヨハネ福音書は聖餐の制定には言及していないとしても、ユダの裏切り、ペテロの否みの預言について同じような記事を載せているから、共観福音書が述べているのと同じ最後の晚餐を叙述していることは確かである」（マックレイ：182）と考えることもしない。なぜなら、『ヨハネ福音書』が史実に忠実であり、かつ『ヨハネ福音書』が記載する晚餐が最後の晚餐であったにしても、その場ではむしろ「仕え合い」を強調する洗足が行われているからである（ヨハネ13,4以下）。

なお現在では、正教会・カトリック教会ともに、聖木曜日を「晚餐の記念の日」、聖金曜日を「十字架上の磔刑死の記念日」、聖土曜日を「墓での眠りの記念日」、そして日曜日を「復活の主日」とする伝承において一致している。この考え方は、四福音書で伝承の一致している金曜日を磔刑死の記念日とし、それに先立つ木曜日を最後の晚餐の記念日として措定する方法で、曜日には注意を払うものの、日付に関しては問わないあり方である。これと軌を同じくして、教会の伝承にあつては、受難週間～復活祭の曜日は固定される一方、その日付は移動することになった（「14日派」は

これと異なる歩みを辿る)。したがって教会伝承は、どの福音書とも齟齬を来たすことではない。ただ『ヨハネ福音書』では晩餐が「過ぎ越しの食事」とは記されていないため、この点に関しては共観福音書の記述を容れたことになる。

□

さて、部分的に繰り返すことになるが、本稿で出発点となる事項に関して確認しておこう。イエスの時代、ユダヤ人による過ぎ越しの記念には、2つのレベルがあったとされる（カンタラメッサ 1997：19）。

①第1段階：小羊の屠殺から成り、これはニサンの月の14日の午後（日没前）、エルサレムの神殿で行われた。この小羊の屠殺は、あくまでも「準備」の段階に属す（cf. ヨハネ19,31：“paraskeuē”）。

②第2段階：ニサンの月の14日に続く夜、過ぎ越しの晩餐のとき、家族ごとに生贄が食された。

以上を『出エジプト記』の記述から確認してみることにしよう。なお以下の一節については、後出ほど「予型論」に基づいて考察するくだりでも参照する。

出エジプト 12,3-13：「3 イスラエルの共同体全体に告げよ。＜今月の十日、人はそれぞれの家ごとに、すなわち家族ごとに小羊を一匹用意せねばならない。...5 その小羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。用意するのは羊でも山羊でもよい。6 それは、この月の14日まで取り分けておき、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り、7 その血を取って、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。8 そしてその夜、肉を火で焼いて食べる。また、酵母を入れないパンを、苦菜を添えて食べる。...11 それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過ぎ越しである。12 その夜、わたしはエジプトを巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。13 あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなた方を過ぎ越し。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなた方に及ばない。...＞」。

この『出エジプト記』の記述によれば、過ぎ越しに2段階がある。

1. 小羊の屠りとその血の塗布（12,6-12,7）

2. その小羊を焼いて食し、あわせて苦菜とともに種なしパンを食すこと（12,8）

おそらく1は遊牧民の記憶、2は農耕民（エジプト時代）の記憶に遡るとされるが（ドゥ・ヴォー 1977）、いまこれらの祭義的淵源を云々することはしない。2を展開させたのが共観福音書記者たちであると言えようが、この際に注意しておきたいこ

とがある。それは『出エジプト記』の時代からイエスの時代にかけて、祭義上の変遷があったことは十分に考えられるが、以下の『ルカ福音書』の記述には「小羊を焼いて食す」という部分に関する言及がまったく見られないという点である。

ルカ 21,14-20：「14 定められた時刻になったので、イエスは食事の席に着いた。弟子たちも一緒であった。イエスは言った。＜苦しみを受ける前に、わたしはあなた方とともにこの過ぎ越しの食事をしたいと切に願っていた。16 言うておくが、神の国で過ぎ越しが成し遂げられるまで、わたしは決してこの過ぎ越しの食事を摂ることはない＞。17 そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから述べた。＜これを取り、互いに回して飲むがよい。18 言うておくが、神の国が到来するまで、わたしは今後ブドウの実から作ったものを飲むことは決してあるまい＞。19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、弟子たちに与えて述べた。＜これは、あなた方のために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行うがよい＞。20 食事を終えてから、杯も同じようにしてこう述べた。＜この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。わたしの記念としてこのように行うがよい＞」。

「神の国で過ぎ越しが成し遂げられるまで、決してこの過ぎ越しの食事を摂ることはない」、あるいは「神の国が到来するまで、今後ブドウの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」といったイエスの宣言は、相変わらず多くの謎を含んでいる（エレミアス 1974）。だがもし、この場面がルカをはじめ共観福音書記者たちの（操作を伴った）設定であるとすれば、すでにこの「最後の晚餐」＝「過ぎ越しの食事」が、神の国＝天国での宴の実現として記述されているのをここに読み取ることも不可能ではなからう。

さて、上ですでに示唆しておいたように、ここには『出エジプト記』に規定されている「小羊を焼いて食す」くだりが見当たらない。もしルカをはじめ、共観福音書記者たちが「イエス＝小羊」の伝承を知っていたとすれば、その小羊たるイエスが磔刑死の後、復活体となって「過ぎ越しの食事」を主宰する、という設定は、エウカリスティア〔聖餐〕＝天国の宴の創始として、じつに相応しく適わしいものだとは言えないだろうか。このことは特に『ルカ福音書』（24,13-35）にあって、復活のイエスが寒村エマオにおいて、二人の弟子たちの前で自らの姿を現したのがエウカリスティアであったことから類推可能であろう。このように、「共観福音書では、最後の晚餐は過ぎ越しの食事の前ではなく、過ぎ越しの食事そのものなのである」（マックレイ：182）と言われるとおりに、共観福音書はその頂点を、「新しい過ぎ越しの食事」としてのエウカリスティアの制定に見出しているのである。

福音書記者たち、ないし初代教会の使徒たちがいずれも腐心していたのは、（復活の）イエスと読者（信徒・未信徒）たちの間を繋ぐシステムをいかに構築すべきか、ということであった。共観福音書記者たちはいずれも、洗礼式を司り、主日ごとに聖餐式を主宰する「教会」のシステムを構築したパウロやペトロたちの路線に随い、聖餐式を「最後の晚餐＝過ぎ越しの食事」として記述することを選択したと考えられよう。彼らのこの選択は、「イエスの十字架刑の日付のずらし」を、影響性の小さい要因と判断することと表裏一体であった。今その是非は問わない。むしろこの点は、本稿で検討を加える福音記者ヨハネとの間で、重点の置き方に関する大きな相違を露わにすることになる。

□

では共観福音書記者たちとは異なり、福音記者ヨハネはどのような歩みを辿ったのであろうか。

まずヨハネは、史実から出発する。それと同時に、先の『出エジプト記』からの引用の際に、

1. 小羊の屠りとその血の塗布 (12,6-12,7)

として措定しておいた点(1)を深化させることになったと言えるだろう。注目したいのは、この1のプロセスでは「小羊の血の塗布」という要因が必須だという点である。『出エジプト記』では

「あなた方のいる家に塗った血は、あなた方のしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなた方を過ぎ越し。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなた方に及ばない」(出エジプト12,13)

とされる。イスラエル人にとって「小羊の血の塗布」という過程は、初子の絶滅という危機を回避するために不可欠のプロセスであった。

このプロセスに関して、いま子細に検討してみたい。ここでは神から民に対し、屠られた小羊の血を家の門柱に「塗る」ことが求められており、その塗血を神が「見る」と同時に神が「過ぎ越し」、民に害を及ぼさないとされる(なお「塗る」の原語は *nāṭan* であり「与える」の意である)。つまり

1. 「(門柱・鴨居に)民が塗血を受ける」ことは「神の過ぎ越し」と等価である
  2. 「しるし」を通じて「見る」行為は、同時に「過ぎ越し」行為を含意する
- の2つの点を確認することができる(なお「パーサハ」[*pāsaḥ*; 「過ぎ越し」*pesaḥ*の根字]という動詞に関しては、オリエント言語学上様々な議論が行われているが、基本的に「通り過ぎる」という意味だと解されている[出エジプト12,13]。これが「パスカ」として近代語のうちに定着し「復活」の意味で捉えられるようになった)。

上記の事柄を小羊の側から言えば、「屠られ、自らの血の塗布が為されること」こそ本来の役割に当たる。自らは生命を取られながら、神の「しるし」となることのうち、小羊の役割が求められていると理解できるだろう。これが「神の過ぎ越し」と同義なのである。さらには、神にとって、自らの民であるイスラエルの初子たちが死なないこと、すなわち初子たちを「過ぎ越す」ことこそ本意である。一方民の側から言えば、死を免れるこのプロセスが「過ぎ越し」であり、もとよりこれは大きなくめぐみ>であるということになるだろう。こうして神は、民の「過ぎ越し」を願うがゆえに、小羊を屠らせ、その血の塗布を要求した。したがってこの一連のプロセスは確かに、神の過ぎ越しであり、かつ同時に民の過ぎ越しである。では「しるし」としてこの間に介在する小羊にとって、「過ぎ越す」余地はどこに残されているのだろうか。

いま、神の過ぎ越しが同時に民の過ぎ越しでもあるという点を確認した。その間の仲介者として介在する「小羊」にとって、自らの過ぎ越しが神・民両者の過ぎ越しと同時的であるに相違ないと推測することは、全く妥当な推論であろう。つまり、

神が過ぎ越し、民が過ぎ越す際、同時に小羊の過ぎ越しも実現するということを、ここで確かめておきたい。「見る」ことの同時性を併せつつ、確認しておく、

1. 神の過ぎ越し：民が自ら塗布した小羊の血を「見る」こと
2. 民の過ぎ越し：神により「見られる」べく、自ら小羊の血を塗布すること  
ここでは「見る」ことと「見られる」ことが同時かつ同義であることに注目したい。そして、
3. 小羊の過ぎ越し：自らの血の塗布が、十分に意識され怠りなく実行されることとなるだろう。過ぎ越しの祭義とは、このように、小羊の流した血の意義が「意識され」「記念される」ことに他ならないのである。

□

次に、『ヨハネ福音書』から第19章の一節（ヨハネ19,31-35）を参照してみたい。

ヨハネ 19,31-35：「31 その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架に残しておかないために、脚を折って取り降ろすようピラトに願い出た。32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との脚を折った。33 イエスのところに来てみると、すでに絶命していたので、その脚は折らなかった。34 しかし、兵士の一人が槍でイエスの脇腹を刺した。すると、すぐ血と水が流れ出た。35 それを見た者が証しており、その証しは真実である。その者は、あなた方に信じさせるため、自らが真実を語っていることを知っている。36 これらのことが起こったのは、<その骨は一



つも砕かれない> (民数9,12) という聖書の言葉が実現するためであった。37また、聖書の別の箇所にく彼らは、自分たちの突き刺した者を見る> (ゼカヤ12,10) とも記されている。

この箇所では、特に後半部分において、イエスの磔刑死が旧約聖書の成就として捉えられるという点が明確になっている。その中心にあるのは「過ぎ越しの生贄としての小羊」像を成就したのがイエスである、という主張である。『ヨハネ福音書』の記述は一貫して、この視点に貫かれている。

この一節に関して、先の『出エジプト記』からの引用と併せ、「真なる神の小羊」であるイエスを光源にして解釈を施してみよう。イエスは「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1,29; 1,36)として、ニサン月の14日に屠られて絶命した。これは小羊の屠殺に対応する。屠られた小羊の喉から搾り取られた血は、民の家の門柱に塗られ、神が過ぎ越すための「しるし」とされて民は災いを免れる。一方十字架上のイエスの場合、すでに絶命しているのであるが、兵士がその脇腹を槍で一突きし、イエスの脇腹からは「血と水」がすぐにほとぼしり出たとされる(ヨハネ19,34)。この記事は『ヨハネ福音書』に固有のものである。またこの現象に関しては、証人の存在と、その証しの真実性が繰り返し告げられる。その目的は「あなた方も信じるようになるため」である(ヨハネ19,35)。

ところで聖金曜日の日没後、すなわち聖土曜日の開始に際し、イエスが十字架上で刑死したのち、『ヨハネ福音書』の共同体はユダヤ人たちに固有の「過ぎ越しの食事」を摂ったのであろうか。これはわれわれだけでなく、もし『ヨハネ福音書』に記された記事が史実であったとすれば、その史実をめぐる、たとえば共観福音書記者たちも「イエスの弟子たちはその夜、ユダヤ人たちに伝わる過ぎ越しの食事を行ったのだろうか」という形で、一様に抱いた疑問であったと思われる。常識的に考えて、この疑問に対するわれわれの回答は「否」であるはずだろう。

その際に採られるイエスの弟子たちの歩みは、先に確認したように、この段階で二様に分かれる。まずその一方は、先に見た『ルカ福音書』ないし共観福音書記者たちのように、ユダヤ人たちの「過ぎ越しの食事」に代わり、新たな「過ぎ越しの食事」が創始されたと理解する方法である。そのためには、十字架刑の日付を14日から15日にずらし、かつ復活後の小羊が種なしパンの儀礼を主宰するという解釈を施さねばならない。ペサハの儀式が2段階になっていることは、神学的(=予型論的)にはこの時点で要請されよう。その次第は先に見たとおりである。その次第はもちろん、後代「聖餐式」の形で教会に伝承されてゆく。なおこれは、『ヨハネによる黙示録』における、復活の小羊をめぐるヴィジョンにつながる面をも有するだろう(黙示録5,6以下)。

もう一方は、十字架上の刑死により人間としての限界を露呈するイエスの姿を「見る」者が、おのれの記憶にその姿を「焼き付ける」という方法である。これが『ヨハネ福音書』の辿った方向である。おそらくヨハネ福音記者は、イエスによる十字架上の磔刑死像を目にし、「血と水の流出」を見たとき、その出来事自体が、ユダヤ人たちの「過ぎ越しの食事」に取って代わるべき意味を持つことを瞬時に理解したと思われる。すなわち、『ヨハネ福音書』の共同体にとって「過ぎ越しの食事」は、旧来のもののみならず新たな意味によるものも含めて、イエスの十字架刑とともにすでに過去のものとなっているのである。ここに「見る」プロセスが関わってくることを確認しておきたい。「それを見た者が証ししており、その証しは真実である」(ヨハネ19,35)と強調されるのは、この意味においてであろう。

□

先に『出エジプト記』における神と民の過ぎ越しの次第に関して、「見る」ことと「見られる」こと、そして神の過ぎ越しと民の過ぎ越しが、同時かつ同義的であることに注目した。さらには、この際同時に小羊の過ぎ越しも実現すると理解された。上に挙げたような、共観福音書記者たちによる第1の方向性が「聖餐式」のあり方を取るようになったのに対し、第2の方向性は、やはり後世の教会にあってもその痕跡を遺していると思われる。それは「堅信」の秘跡である。それはさておき、ヨハネの取った方向性をもう少し追究しておくことにしよう。なお本稿では、『ヨハネ福音書』の記者と『ヨハネによる第1書簡』の著者とは同一であるという前提に立っている。

その『ヨハネによる第1書簡』の第2章には「聖なる方からの塗油」という表現が見られる(1ヨハネ2,21)。この箇所は通常次のように訳されている。

「あなた方は聖なる方から塗油(chrisma)を受けており、あなた方はみな、そのことを知っている」。

この一節における「塗油」の意味は謎である。レイモンド・ブラウンによれば、ここに問題点が四つ見出される(Brown 1982: 342-348)。

1. 膏薬なのか塗油なのか。
2. (塗油であるとして) どのような種類の塗油であるのか。
3. 塗油が授けるものは、聖霊なのかそれとも福音の言葉であるのか。
4. 「聖なる方」とは神であるのか、それともイエスであるのか。

「塗油」と訳された原語は chrisma であり、chriein「塗る」という動詞の名詞形である。教会の秘跡用語としては、先にも言及した「堅信」の秘跡を表す語彙となる(なお「病者の塗油」の典拠として引かれる『ヤコブによる書簡』[5,14]で用いられる動詞は aleipein)。ちなみに新約聖書において、chrisma という名詞形で現れるのは、『ヨハネによる第1書簡』に現れる3カ所、すなわちこの2,21と、2,27の2度

のみである。しかしながら、*chriein* は単に「塗る」という意味であるから、教会における秘跡の背景を帯びた「塗油」という訳語は、必ずしも用いる必要がないのかも知れない。本稿では以下「塗布」と訳しておく。すると 1 ヨハネ 2,27 は「あなた方に関しては、かの方から受けた塗布があなた方のうちに留まっているので、誰かがあなた方に教えを授ける必要はない。むしろかの方の塗布があなた方に対し、すべての事柄に関して教える。この塗布は真実であり偽りではない。この塗布があなた方に教えたとおりに、そのうちに留まるがよい」となるだろう。

本稿ではこの「聖なる方からの塗布」を、先に引いた『ヨハネ福音書』19,34、さらには『出エジプト記』12,13 と関連づけてみたい。前者では「イエスの脇腹からの血と水の流出」が語られ、後者には「屠った小羊の血を、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る」ようにとの指令が記されていた。『出エジプト記』ではこのように、ニサンの月の 14 日に小羊を屠るだけではなく、その血を家の門柱に塗布することが求められ、これが神と民の「過ぎ越し」にとって必須のプロセスとなっている。すると『ヨハネ福音書』において、この「塗布」はどの段階に相当するのであるうか。

この問題に関して、本稿では「見る」ことによる「記憶への塗布性」に注目し、十字架上のイエスの脇腹からの血と水の流出を目にした者は、その記憶のうちにイエスの「血と水」を塗布する（ヘブライ語原典では「与える」であった）のだと考えてみたい。福音書の記述を読む、ないし聴く者は、眼前にかならず十字架磔刑の図を想起し、そこに「血と水の流出」の場面を現前させる。その際、テキストを聴覚で受容すると同時に、視覚によりその場面を想起している。一度想起したその像の記憶を消去することは、容易ではないはずである。これが「小羊の血の門柱への塗布」に相当する、新約次元での「小羊キリストの血の塗布」である。

次に、門柱に塗られた小羊の血を見て神が「過ぎ越す」段階については、どのように考えればよいのだろうか。これは民の「過ぎ越し」、すなわち初子の殺戮を回避する「救い」の段階と軌を一にしていた。したがって、まず民の側から言えば、これは「死の回避」つまり「罪からの解放」を意味すると思われる。そして神は、そのような過ぎ越しの民に対してはこれを「過ぎ越す」、すなわち「咎めない」「罪ありと裁かない」という振る舞いを取ると考えられよう。そしてこれら民と神の「過ぎ越し」が同時かつ同義的であるだけでなく、小羊の「過ぎ越し」もまたこれと同時に生起する。これが「神・小羊・民」にとっての、共時的「過ぎ越し」すなわち「救い」「復活」であると考えられよう。したがって『ヨハネ福音書』の読者が、自らの記憶のうちに「小羊キリストの血」を塗布する際、これと同時に小羊キリストが復活し、神も過ぎ越しを遂げると理解されよう。

すると、ブラウンにより第4番目の疑問とされていた「聖なる方」の実体とは何であろうか。本稿では、十字架上ですでに絶命したイエスのわき腹からほとぼしり出る「血と水」こそ「塗布」される実質であると考えてきた。直接的には、その源泉は絶命しているイエスであるから、さらに遡って「父」のレベルで考える必要があるかも知れない（後世における「フィリオクエ」の問題にも関わりうる）。書簡の著者ヨハネが言う「聖なる方」の実体とは、以上のような内実を含む複層的なものであると考えたい。

□

さて、上に引いたのと同じ『ヨハネによる第1書簡』には、次のような一節がある。

「わが子たちよ、わたしがあなた方にこれらの事柄を記すのは、あなた方が過ちを犯さないようになるためである。またたとえ過ちを犯しても、われわれは父への〈パラクレートス〉、正しき方イエス・キリストを有している。この方こそ、われわれの罪、否、われわれの罪ばかりでなく、全世界の罪を償う生贄である」（1ヨハネ2,1-2）。

ここには「パラクレートス」という語彙が用いられている。この語彙「パラクレートス」は、上掲した『ヨハネによる第一書簡』の一か所のほか、『ヨハネ福音書』では14,16；14,26；15,26；16,7の四か所に現れる。こうしてこの語彙は『ヨハネによる福音書』と『ヨハネによる第一書簡』をつなぐ役割を果たしている。通常この語は「弁護者」と訳されるとともに、教義学的には「聖霊」の位置づけを与えられるのが慣例である。

ここで問題としたいのは次の二点である。

1. 「われわれが過ちを犯さないようになる」という状況とはいかなるものなのか。
2. 「たとえ過ちを犯しても、われわれは父への〈パラクレートス〉、正しき方イエス・キリストを有している」という論理は、どのように理解可能なのであろうか。

この二つの問いに対する回答を求めて、『ヨハネ福音書』における四つの用例を参照してみよう。

1) ヨハネ 14,15-17a：「あなた方はもしわたしを愛するなら、わたしの掟を守るだろう。わたしは父に願って、別の方・パラクレートスをあなた方の許に遣わしてもらえるようにしよう。その方があなた方とともに永遠にいるようにするためである。それは真理の霊である」。

2) ヨハネ 14,26：「パラクレートスは、父がわたしの名において遣わす聖なる霊であり、この方があなた方にすべてを教え、わたしがあなた方に語ったすべてを思い起こさせてくれる」。

3) ヨハネ 15,26 : 「パラクレートスは、わたしがあなた方に、父の許から遣わす方であるが、この方、すなわち父の許から流れ出る真理の霊がやって来るとき、この方はわたしについて証しするであろう」.

4) ヨハネ 16,7 : 「本当のことを言うなら、わたしが去ってゆくのは、あなたがたにとって益となるのだ. なぜならもしわたしが去ってゆかなければ、パラクレートスはあなた方の許には来ないからだ. わたしが行けば、わたしはこの方をあなた方の許に遣わすであろう」.

この「パラクレートス」を遣わす者が父であるのか (1) , 父がキリストの名において遣わす方であるのか (2) , もしくはキリストが父の許から遣わすのであるのか (3 ; 4) といった諸問題が、先にも言及した「フィリオクエ」問題として東西教会間の懸案事項となってきたことはよく知られている. だがここでそれらについて問うことはしない. むしろ本稿では、「小羊としてのイエス」が、その血を通して、民と神の過ぎ越しを成就するための「しるし」となったというこれまでの立論を基に、「パラクレートス」がどのような実体であると理解すればよいのかについて、一定の回答を試みてみたいと考える.

まず「われわれが過ちを犯さないようになる」という状況は、ちょうど小羊の血の塗布を通じ、『出エジプト記』にあって神が民を過ぎ越し、民が死を免れることができたのと同様、十字架上のイエスから流された血 (ヨハネ 19,34) を記憶に塗布することで、われわれが罪=死を免れうる、という状況だと理解できるだろう. それでもなおわれわれ人間にあっては、過ちと無縁のまま生きることができない.

注目したいのは、『ヨハネによる第1書簡』では上掲2のように、「パラクレートス」が「正しき方イエス・キリスト」と同定されているという点である (a) . これに対し『ヨハネ福音書』では、「パラクレートス」はイエスとは「別の方」 (1) であり (b) , 「真理の霊」 (1) ・「聖なる霊」 (2, 3) であり (c) , 「イエスについて証しし」「イエスが語ったことすべてについて思い起こさせる」 (2) 存在である (d) . ただしその方は、イエスが去らなければ到来しない (4) とされる (e) .

「パラクレートス」をめぐる以上の規定に対し、小羊すなわちイエスの血を当てはめてみよう. a の規定に関しては、十字架上でイエスが脇腹から血と水を流し、さらにそれを「見る」者が自らのうちにその血を宿すことを「イエス・キリストの復活」と考えるのであれば、復活体のイエスが流す血を「パラクレートス」と同定することに、何ら問題は生じない. ただしこの際、やはり「血と水の流出」を「イエス・キリストの復活」と理解することが必須となる. b については、生前のイエスであればむしろこれは自然な言葉であろう. c と e についても問題はあまい. d に関しては、1) にあってこの「パラクレートス」が「あなた方とともに永遠にいる」存在として

語られている点を考え合わせてみたい。すると神の「しるし」である「小羊の血」を宿している点こそ、むしろイエスの本質であるという点が明瞭となる。地上のイエスとは「神の小羊の血の受肉体」なのである（ヨハネ 1,29 ; 1,36）。こうして、自らの血を神のための「しるし」（出エジプト 12,13）として宿す小羊は、「生ける血」を何時なりと注ぎ出すべく生の期間を生きている、と表現できるだろう。ここに「宿り（miškān ; <šākan [幕屋を張る]）としての地上での生」（ヨハネ 1,14）の意義が確認されよう。血は単独では生命体ではなく、宿りのための媒体が必要だからである。

以上の考察によって、「パラクレートス」の実体も明らかになるであろう。この語彙は παρακαλεῖν「要請する」の動詞形容詞第1形でもあり、「要請された存在」といった意味が当たるのではないだろうか。小羊の血であれば、人間の側からは門柱や鴨居に塗ることに終始せねばならない。われわれの体内にその血を塗布することが可能となるためには、イエスが人間として生き、十字架に懸って小羊の血と人の水を流すことが不可欠であった。イエスの身体は、小羊の血を人間として「宿す」ために必須だったのである。そして「たとえ過ちを犯しても、われわれは父への<パラクレートス>、正しき方イエス・キリストを有している」という論理は、パラクレートスをイエス・キリスト自身とするにせよ、神の小羊としてのその血とするにせよ、人が自らへのその血の内在を想起・再確認するとき、罪からの解放が遂げられる、との意であると理解できるだろう。

また「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲まなければ、あなた方のうちに生命はない」（ヨハネ 6,53-54）という規定についても、必ずしもこれをパスカ（聖餐式）の儀礼と関連づけて理解する必要はないであろう。ペサハにおいて「血を飲む」ことはないからである。逆に「わたしの血を飲む」とは、小羊の血を自らのうちに塗布する、という意味であると解してみたい。

□

「小羊の過ぎ越し」、そして「小羊の血」というテーマを巡って展開してきた本稿であるが、以上の考察から、『ヨハネ福音書』に潜む様々な他の問題にも回答を与えうると考えられる。まず『ヨハネ福音書』冒頭の「ロゴス」に関してであるが、神の小羊キリストと同定されるこの *logos* は、本稿での考察からも明らかとなったとおり、神の活動の「しるし」として、その活動と同時的に機能し、かつ生命体として人間の内部にも浸透すべき実体であった。*logos* は当然、動詞 *legein* の名詞形であるが、*legein*「言う」「話す」とは、本来「分節化する」といった意味合いの語彙である。「分かつ」という意味をここに読み込むことができるならば、「罪から分かつ」しるしとして、実に適わしい語彙が選択されたと言ふべきであろう。この「ロゴスは神とともに」あり（ヨハネ 1,1）、神は罪（過ち：*hamartia*, cf.1 ヨハネ 2,1）とは無縁だからで

ある。また「創られたものの中で、それなくして成ったものはなかった」（ヨハネ 1,3）のは、このロゴスが神の「しるし」として常に神とともに機能したことを表す。さらに、このロゴス＝小羊の血は罪とは無縁であるため、「光は闇のうちに輝き、闇はこの光に打ち勝つことはなかった」（ヨハネ 1,5）とされるのである。

次に『ヨハネ福音書』第 20 章の一節（ヨハネ 20,1-10）を取り上げてみよう。

ヨハネ 20,1-10：「1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛していたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。＜主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちにはわかりません＞。3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロよりも速く走って、先に墓に着いた。5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じところに置かれてはおらず、離れたところに丸めてあった。8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9 イエスは必ず死者の中から復活することになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10 それから、この弟子たちは家に帰って行った」。

ここには「イエスが愛していたもう一人の弟子」が「見て、信じた」（ヨハネ 20,8）という一節がある。この弟子は先に第 19 節（19,34）において、十字架上で絶命したイエスの脇腹から、兵士による槍の一突きのために「血と水が流れ出た」（ヨハネ 19,34）と記録したのと同人物である。この血と水の流出を「見る」行為が、神の過ぎ越しを招くべく屠った小羊の血を門柱に塗る行為（出エジプト 12,7）に対応するという点については、すでに確認を終えた。そして『ヨハネ福音書』の読者が、自らの記憶のうちに「小羊キリストの血」を塗布する際、神・民・小羊の過ぎ越しが同時に成立する、すなわち「小羊キリスト」の復活が成立する、という点についても確認した。するとこの弟子のうちに、すでに復活の小羊が内在しているのであり、「見て、信じた」（ヨハネ 20,8）という句は、目に見える外界に小羊が存在しないことを確認した、との意味において「信じた」、という経緯であると理解できるだろう。

同じく『ヨハネ福音書』第 20 章の 29 節には、復活後のイエスがトマスに対して「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである」という一節がある。この一節の後半部分についても、上での考察が有効だと思われる。すなわち、トマスは実際に復活したイエスの脇腹や両手に触れて信じたが（ヨハネ 20,28）、先の「愛

された弟子」のように、「目に見える外界に小羊が存在しないことを確認し」，すなわち「見ないのに」，信じる者は幸いである，との意味だと理解してみたい。

□

最後に『ヨハネ福音書』から，上に続く一節（ヨハネ20,11-18）を取り上げよう。

ヨハネ20,11-18：「11 マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると，12 イエスの遺体の置いてあった場所に，白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に，もう一人は足の方に座っていた。13 天使たちが「婦人よ，なぜ泣いているのか」と言うと，マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか，わたしには分かりません」。14 こう言いながら後ろを振り向くと，イエスの立っているのが見えた。しかし，それがイエスだとは分からなかった。15 イエスは言った。「婦人よ，なぜ泣いているのか。誰を探しているのか」。マリアは，園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのなら，どこに置いたのか教えてください。わたしがあの方を引き取ります」。16 イエスが「マリア」と言うと，彼女は振り向いて，ヘブライ語で「ラプブーニ」と言った。「先生」という意味である。17 イエスは言った。「わたしに触れてはならない。まだ父の許に昇っていないのだから。わたしの兄弟たちの許に行って，こう言うがよい。『わたしの父であり，あなた方の父である方，また，わたしの神であり，あなた方の神である方の許にわたしは昇る』」と。18 マグダラのマリアは弟子たちのところに行き，「わたしは主を見ました」と告げ，また，主から告げられた事柄を伝えた」。

この一節では「わたしに触れてはならない。まだ父の許に昇っていないのだから」という17節が，昔から「ヨハネ福音書の **Cruc**（十字架）」として，また“*Noli me tangere*”（「われに触れるな」）という句によって著名である（伊吹 1994：122）。筆者は，現在から四半世紀前に，この箇所をめぐる未熟な試論を記したことがあるが（秋山 1992），本稿での考察を踏まえ，現段階での見解を提示してみたい。本稿では「神の小羊としてのイエス」という視点を一貫させ，小羊の血がいかにして受け手の内面に塗布されるか，そのメカニズムと意味を追究してきた。その結果，受け手の内面に，小羊の血の塗布＝罪からの解放が実現することこそ，小羊の過ぎ越し＝復活に他ならない，ということが明らかになった。したがって，復活のイエスとは受け手の外界に現れるものではないのである（Akiyama 2011）。上に引いた一節では，マリアがイエスのことを，まだ自らの外界に探し求め得る存在だと誤解している点に関して，イエスが「わたしはまだ父の許に昇っていない」と語ったものと理解できる。「わたしに触れてはならない」と訳される箇所も，「わたしに触れられると考えるは



ならない」といった意味で理解可能であろう。そして、マリアの〈わたしは主を見ました〉という発言は、彼女のうちに神の小羊の血が塗布された、との意であろう。

先に「血と水の流出」を「イエス・キリストの復活」と理解することが必須である旨を記しておいた。いま「復活」という事態の本質を考えてみよう。ふつうわれわれは、復活とは「地上での生」の復活であると理解しがちである。しかしながら「その存在が持つ、本来のあり方の復活」をこそ「復活」と呼ぶのであれば、霊的な血＝神の小羊の血を宿したイエスの復活とは、まさしく天上的なあり方でこそ実現するはずである。この意味でも、イエスの復活は「十字架上のイエスのわき腹からの、血と水の流出」（ヨハネ19,34）の時点で実現したとすべきであろう。「神と民の過ぎ越し」＝「小羊の過ぎ越し」としてきた本稿の論旨に対し、この立論は正確に一致する。

□

本稿では先に、「準備の日」に十字架上のイエスの磔刑死を目撃した弟子が、その夜に取るはずであった「過ぎ越しの食事」を前にして、後世における教会の伝承に当てはめるならば、二通りの選択肢を採りえたことを示唆した。その一つが後世の「聖餐式」へと発展する方向性であり、もう一つは「堅信の秘跡」へと展開する方向性であって、前者が共観福音書の採った方向性、後者は『ヨハネ福音書』の方向性であったものと推測した。本稿での考察を基に、いま後者について付記しておくことにしよう（以下 Katrij 2011 : 152–155）。

キリスト教の初期の時代、堅信の秘跡は洗礼の直後に行われていた。エルサレムのキュリロス（387年没）は『秘義へのカテケシス』（第3講話）の中で、信徒志願者に向けて堅信の秘跡をこう説明している。

「キリストにおいて洗礼を受けたわれわれはみな、キリストを身にまとっている（ガラテヤ 3,27）。あなた方は本当に、キリストに与っているがゆえにキリスト者、すなわち油を注がれた者と呼ばれるのである。あなた方は聖なる水のたらいから出ると、オリーブの油を塗られる。それはちょうど、キリストが聖霊によって塗布されたのと同様である。彼は霊の油によって、すなわち聖霊によってであるが、あなた方は香油によって、キリストに与る者、その似姿となるのである。そして身体が目に見える仕方で油を受けたならば、そのとき靈魂が、聖にして生命を与える聖霊によって聖化されるのである」。

一方、ラオディケアの公会議（364年）もこう規定している。

「洗礼を受けた者たち、すなわち光を受けた者たちは、香油を塗られ、神の王国に与る者となるのである」（第48条）。

こうして「堅信の秘跡は、神の智慧をまとわせ、聖なる信仰の雄々しき告白に向けて受洗者を強め、常にかつ何処にあってもキリストの善き兵士となるように強める。

洗礼と同様堅信も、靈魂に消し去ることのできないしるしを刻みつけるが故に、これら二つの秘跡には、ただ一度しか与ることができない。古代教会より、香油を聖化する権限は司教ないし総司教にしか与えられていなかったが、東方ではこの秘跡を司祭も執行することができるのに対し、西方では執行権も司教に限られていた。しかし第2 ヴァティカン公会議以降、西方にも古代以来の東方の慣習が取り入れられ、司教により聖化された香油をもって、司祭がこの秘跡を執行することができるようになった」（秋山 2013 をも参照）。

このように、堅信の秘跡は香油やオリーブの油などを通じて授けられてきた。ただこの秘跡が、弟子たちのうちへの聖霊の現存を実現する秘跡であること、またヨハネ福音記者がこの聖霊の現存の証言に心を砕いたことについては特記されている（アブリ：1985）。この点は、本稿で見たように、『ヨハネ福音書』にあってイエスの生命の本質が「神の小羊の血」であること、またその血とは塗布され内在して死を回避させる働きを持つものだという事と軌を一にする。そしてこの働きはまさしく、「堅信の秘跡」で授けられる「聖霊」のめぐみに他ならない。本稿においても、『ヨハネ福音書』と『ヨハネによる第1書簡』で語られる「パラクレートス」を、小羊の血・イエスの血と同定する試みを提示した。このパラクレートスは旧来、「聖霊」の位置に置かれてきたものであった。

秘跡神学では、堅信の意味が過小に評価される傾向があるとされる（Sartore 1993：875）。その理由の一つとして、堅信の秘跡の起源が十分に理解されていないという点があるのではないだろうか。また『出エジプト記』に見る小羊の血の塗布は、通常堅信の秘跡との関連で参照されることはない。しかしながら、堅信の秘跡の原意は、まさしく小羊の過ぎ越しに見出され得るだろう。

□

本稿で明らかになったことをまとめて、結論としたい。『ヨハネ福音書』におけるイエスとは、その第1章で洗礼者ヨハネが明らかにしているとおり、「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1,29）に他ならない。この「小羊の血」は、イエスによる十字架上の死と、その脇腹からの血と水の流出により、福音書の記事を通して、それを「見る」者の記憶のうちに塗布され、死＝罪からの解放をもたらす。後世における教会の秘跡には、共観福音書と『ヨハネ福音書』の各々にその淵源を求め得るもの、すなわち「聖餐」と「堅信」がある。しかしながら、史実に基づく『ヨハネ福音書』のテキスト読解そのものを通じて、読者のうちには死＝罪からの解放が実現しうる。これまでの聖書注解書・研究書の類は、そのほとんどが教会教役者の手で記されてきた。その伝承を軽んじることなく、けれども教会以外の場で「聖書」を読み解く道が示さ

れることも、「世俗化」の進む現代世界にあっては不可欠であろう。『ヨハネ福音書』は、現代におけるこの要請をも十二分に受け止め得る豊かさを内包しているのである。

#### 【参考文献】

- 秋山学 2017 「14 日派に学ぶ」 『文藝言語研究 文藝篇』 第 71 巻収録予定，筑波大学  
文芸・言語専攻.
- 2013 「『カトリック東方諸教会に関する教令』解説」 第 2 バチカン公会議文書公  
式訳改訂特別委員会監訳 『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』 742-761 頁。  
カトリック中央協議会.
- 2007 「ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書—古代学の源泉としての「メノ  
ロギオン」 (1) —」 『文藝言語研究 文藝篇』 第 52 巻 1-38 頁，筑波大学文芸・  
言語専攻.
- 1992 「『ヨハネ福音書』における女性の役割と意義—言葉の誕生と成立をめぐっ  
て—」 宮本久雄編 『古代地中海世界における「女性」の役割と意義』：平成 2-3  
年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 37-48 頁，東京大学  
教養学部.
- 伊吹雄 1994 『ヨハネ福音書と新約思想』 創文社.
- アブリ，J. 1985 『堅信の秘跡と聖霊：キリスト者のうちに働く聖霊』 中央出版社.
- カンタラメッサ，R. (片岡仁志・庄司薫共訳，M. カンドゥッチ監訳) 1997 『ミサ  
と聖体』 聖母の騎士社.
- ドゥ・ヴォー，R. (西村俊昭訳) 1977 『イスラエル古代史 起源からカナン定着ま  
で』 日本基督教団出版局.
- エレミアス，J. (田辺明子訳) 1974 『イエスの聖餐のことば』 日本基督教団出版局.
- レップレ，A. (増田和宣訳) 1966 『聖書の世界』 山本書店.
- マックレイ，G. (堀口委希子訳) 1982 『ヨハネ福音書への招き』 エンデルレ書店.
- Akiyama, Manabu 2011 „A »közösségért saját életet adó Jézus lelke« János  
*Evangeliumában: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia  
tükrében*”: Benyik György (szerk.), „*Testben élünk*”, 161-169, 22. Nemzetközi Biblikus  
Konferencia 2010. szeptember 9-11., Szeged, Hungary.
- Brown, Raymond E. 1982 *The Epistles of John: A New Translation with Introduction and  
Commentary*, Doubleday.
- Cantalamessa, R. 2007 *La pasqua della nostra salvezza*, Genova-Milano.
- Katrij, Julian J. 2011 *Keresztény örökség: a keleti egyház hagyatéka*, Miskolc.
- Sartore, D. 1993 “Il sacramento della confermazione”, in: *Catechismo della chiesa cattolica:  
Testo integrale e commento teologico*, 875-879, Casale Monferrato.